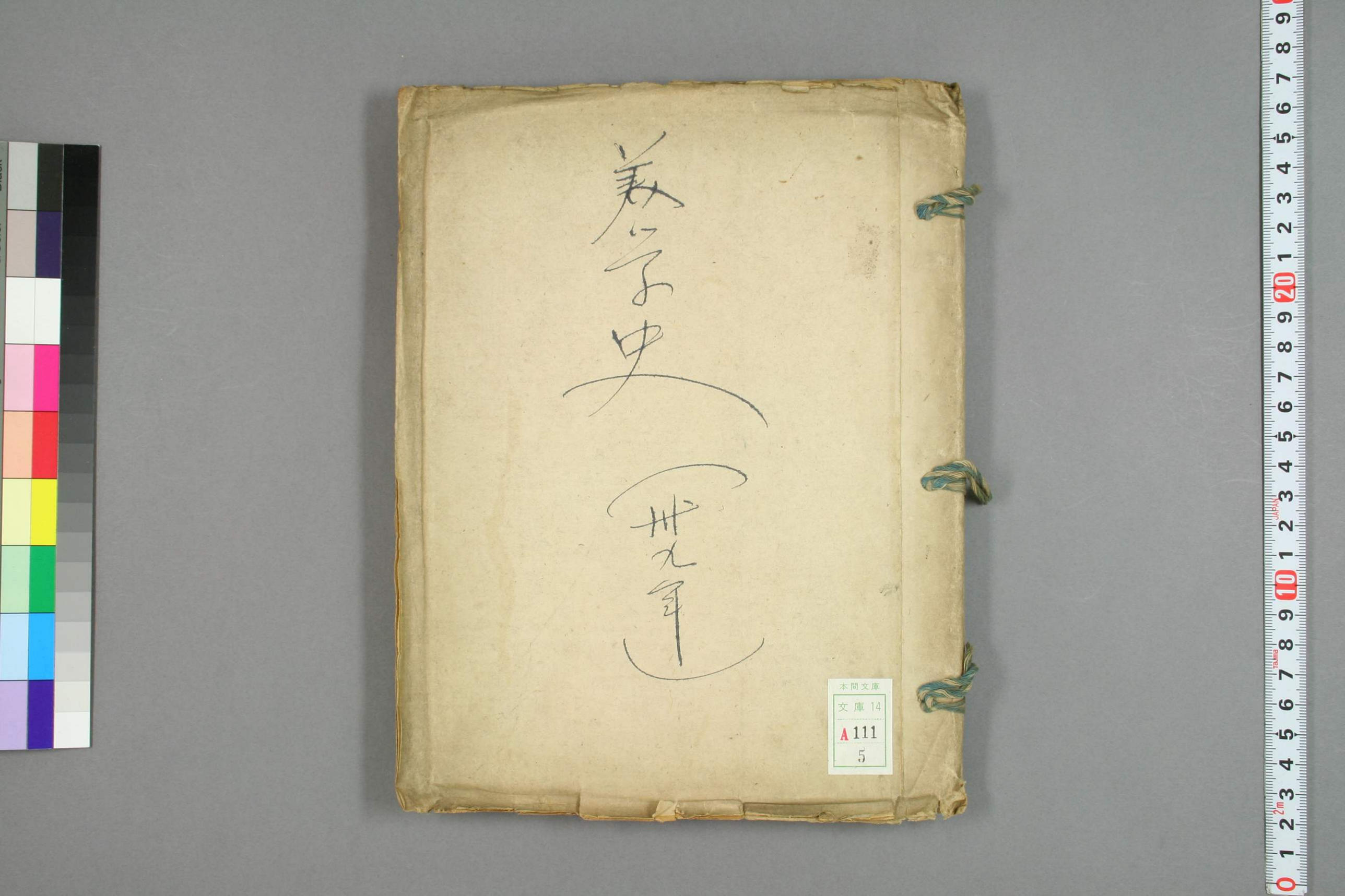

本間文庫
文庫 14
A 111
5

文庫14
A111
5

東京市牛込區百人町六番
藥王寺前町十番地
島村瀧太郎

(1) Kritische Geschichte der Aesthetik. 2 Bde. von Max Schasler ~~Max 1872~~

(2) Aesthetik; Erster ~~Teil~~ Teil: Die Deutsche Aesthetik seit Kant. von E. Hartmann

(3) History of Aesthetics. by Bosanquet.

(4) Geschichte der Aesthetik als Philosophischer Wissenschaft. von Zimmermann.

(5) ~~Vorschule~~ Vorlesung der Aesthetik: von Stein.

(6) II ~~Teil~~ Historischer Teil.

Geschichte der Aesthetik in Deutschland. von Lotze

Geschichte der Aesthetik des Altertums. von Walter.

(2) (1) Philosophy of the Beautiful ~~II~~ I by Knight.

(3)

家法一定として保利のまもり

(8) Aesthetics in Europe. Brit. by Sullay.

一語を要する文也

第二、美学史上の重要法則同

第二 美学史上の時期

美学史といへば美学と云ふ歴史をしたものが無論なくてはならぬが通例美学即ち Aesthetik 又は Aesthetics が此の時に成立した始めは夫の何の哲学者 Frankfurt am Oder の大学の哲学者 Baumgarten が に関する Aesthetica と云ふ書に名付けて Aesthetik と云ふ語は希臘の αἰσθητικός では其の意味は anything that has to do with perception by the senses; 即ち感覚に関することと云ふ義である。之れがバウムガルテン近世或は其の云ふ如く後までは依然此の語は専ら感覚などと云ふ義に用ひられて来たのであるが何時ともなく特殊の義となつて今では Aesthetics と云へば美の哲学 Philosophy of the beautiful と云ふ義となつたのです（名は兎も角も）併し本当に美学が独立して一科の研究として哲学内に地位を得るのはカントに從ふと見てよい、此の意味でハートマン氏は其の美学史をカントに從って開いて、又ボザンケ氏は亦カント以前の美学を寧ろ近世美学の其の準備と見て居るは

真の意味の史学はハートマン氏の説く所に始めてよりか知れぬが、其の前の学問は目的の順序として皆しなくてはならぬ。

学問は其の時期は一つずつ種に区分しますが、其の区別は便宜のため普通の上世中世近世と云ふ名を用いません、思想の発達の上から言ふと別段は明らかなる海岸の方で言ふに過ぎとなりますから。高等な史の研究の切り方で考えますと

見方はハートマン、ボザンケでは其の思想の発達の上から言ふと年代的に区分しないで、即ち紀元前七百年代の所謂Ancient、Alexandrian、Modern と

なくなりますが、ボザンケ氏でも大体は Greeco-Roman、Middle Age、Modern Age の

区別はしてあります。其の中世の部は最も興味ある時代で

学者で、昨年代的と思はるるものを巧みに調和させてある。

あるに常りて見ると彼の考へ方はカンニングハムとヘーゲリアンとの中間に位する人である。

彼は主観的感覚 subjective

理解的な考察 Verständigen Reflexion 理性的な思考 Vernünftigen Denken の三段を通じて展開されるものであるが、先づ大体に人の意識的判断 Empirisches Urtheil 理解的判断 Verständiges Urtheil 理性的判断 Vernünftiges Urtheil の三つ

これらと共に実際的判断 praktisches Urtheil 美的判断 ästhetisches Urtheil 等もあるが、而して哲学上の理性的判断 philosophisches Urtheil とは

亦にもおのづから三段の同じ中なる別がある

(1) 先験的哲学に於 Reflektirende Urtheilskraft (2) 経験的哲学に於 Bestimmende Urtheilskraft (3) 哲学的哲学 Philosophische Urtheilskraft

2 (a) 直覚的 Intuitive (b) 先験的 Reflektirende (c) 思考的 Speculative の三段に分れ

(b)は十八世紀哲学を代表し (中世は哲学そのものなり) (c)は十九世紀を代表し

(a)は上古哲学を代表し

現在まで之に属する 直観的哲学 Plato

之等の思想は Cruttelo より四方的思想は Reid より十八世紀末葉の
は直接には Berkeley より之等の思想は Leibnitz より
思想的に十九世紀の始は直接には Schelling より
の Schleiermacher の Rullmann より
の Schelling より一Schleiermacher の思想の実に此の Schelling と之れ
の初頭を調和し
なる哲学者なりとの意味にて Fichte 哲学とも云ふ
之は海義で上世中世近世と分ちその代表者を挙げ方
と同じく西紀第二世紀頃プラトー学派の終りの頃
次まで上世とし、それより十六世紀の初の教師等の
しまで凡そ十三世紀迄を中世とし其後を近世とします

本論

第一、上世の哲学

(一) 緒論

西洋美術の萌芽は希臘に前期ヒポクラテスの頃に既に見られし事、美術史の示す
る所なれども其の時代にあっては未だ社会上の状態等まで之れを思索の対象
となす程に進歩せず又単に美術のみならず一般の哲学は未だ幼稚なりしに伴
はざりしなり、又哲学の元祖たる希臘に於てさえ紀元前の世紀、ソークラテース
プラトーに到りて始めて哲学の[illegible]と称するに足るべき哲学の創成を見たるに過ぎず。天地
もしかくの如くなるに関して早くメーレスの下論の哲学思想
の美術の様で来る所迄進まざる限に於て是れは上古
他の[illegible]実際的方面のみに切に人生の[illegible]は単の注意を惹かざりしと云ふ性質なるが為め
也存心経の如き[illegible]少なりしと云ふ
希臘の美術の[illegible]其の最も代表的なる彫刻が花咲き一旦ペリクレース時代の盛
大なる達して永劫の生命なる一規範となるやはじめて其の時代の哲学の気
運に合して[illegible]プラトーの哲学を喚起せしめたるに過ぎず。ソークラテースに

(8)

評[illegible]からなりではないが結局はプラトーで形を成し[illegible]と言はねばならぬ、但し藝術の發展史をしらべて見ると先づソークラテースが開巻第一ではないらしい

(二) ソークラテース以前の藝術

傳ふる所によればソークラテースの少し前なる Xenophanes (Xen. 570–480 B.C.) の斷片には Homer の詩篇に對して是れ[illegible]寓言なりとの觀を抱けりと見れば後の藝術論者によつて說かれし藝術は現実の模倣なりとの説に對すべき一種の模倣論即ち形似上の模倣以上或る精神を寓すとなすものか或は寧ろ同じく藝術美に[illegible]もたらす善惡の目的を有すとなす考へに[illegible]して何か寓意を上で功利的見地とみるのであるか今日では明かでない

まゝの[illegible] (Pythagoras ? 582–? B.C.) 學派が數字を重んじて詩歌音楽の藝術を數の平衡であるとしたのは藝術美學の他の形としては形式觀即ち七言を[illegible]類

一調和とか均斉とかいふ思想と[illegible]通じるものである アリストテレースの傳ふる所

みること、けだし数は一切のものの根源である数の本体を音の上に宣べしるされたるものなりと。その性質をもつものの一種の動物性を認めんとするものの如くなり。数の性質を推して行けば、断乃至数を[illegible]すること能はざる一の動物なりと。花鳥[illegible]あるに、[illegible]なりとの見方を用ひしことなれば

或る形之

そうしるかけの見はまた世のよりのひなり

(三) ソークラテス

Sokrates (470〜399 B.C.) 希臨の哲学者。西洋哲学の祖。[illegible]

[illegible]

方は早くピタゴラスに於いて認められたるものなれども、彼の哲学は[illegible]

[illegible]

[illegible]

(11)

（現実の有りのまゝを）は模写したに已に蒐集せるものを許して思想で書かれた芸術を写生を模写する
者が最も低い所に置かれるとしたものである。
又彫刻家 といふ者の注意したのは良工の刻むところの像は善く人心の作用をも
はさんで居なければならぬ人体の姿態ならば之を模写せずにいられずして而して時に人心の作用と
が注ぐからして之を写生して作品の姿態を模写して人の気分を抜いたのであらうといふので
ある。けれども写生する形体の模写以上に模様のこともまた芸術
に加へてをかしいたのである。
又 東洋人の目的に合ひ用をもたらすに適するものは をもって
幸福で美術であるがまた之をもって少しも不要で醜である。例へば衣の着物（尤も）住居に適し
ての装飾もあり又日常の器物の如きも善く用に適してゐれば之美で、其の椅
も用に適せざれば美でなかりき。一寸もんどでは只ラテースは印刷の為
従って只外芸術の如きを許さなかったのである。是れ東洋美学の特色の一である
る。

(四) プラトー Platon (427-347 B.C.)

彼は師のソクラテスに師事し又ペルシアに生まれ
時代の哲学者であり盛の時代に遭遇した人である其の著は問答体の形
式で書かれ其の多くは哲学問題
を扱ふ "Hippias major" "Symposion" "Phaedrus" "Philebus"
"Republic" "Gorgias" 等である。彼は師の思想を吸ふまで独立の
とあつてあるが其思想は師の影響を受けしことの
の著作を彼の著作中に系統を求めて見ると
集めて見ると一応まとまりがある。隠れ
プラトーの哲学は四元素説を採用した理念(Idea)
と云ふ絶対至善至美の実体の実現であるとし
人は知見の眼を用いて之れを観
察する

(12)

Purity of pleasure is beauty

Plato

Philebus (51)

(2) さて彼は先づ美術を模倣と云ふのみを実在と異なれば代の所説と異なれば

に美術のみならず現実界をもふくめ絶対理想の模倣であるが故に美術模

写の模写となる地位に置くもの（Mathématiques mise non is mimesis）

(3) 而して美は理想に美術の為れば絶対理想の表

象なり現実界は美術は之を写すものなれば

絶対理想の表象と云へる（Phedrus）

深い所に求めて已まず理想界の現象の現象

(4) 偖し彼は考へ絶対理想の表象（Symposium）

之を低級なるものとなし形の数学的関係によって均整

調和なるの説明とし現実界は現象界の上に立つ美術

は已にピタゴラス派の説なり

(5) 而して前代の所説と異なれば（Philebo）

とするのみならず現実界の思想と同じくして有用なる思想・合目的

の要件として要する（Sophistes）

(14)

(6) ~~從來美人の精神の完全部に現はさうとする個々の作者~~ 其の
~~絵画も彫刻も~~ 彼はまさしく美術中音楽の如きはよく人の精神
美術の円満性を損する分子多きものとして、之はソークラテスも之を用ひ
いる模写級から様式級まで大分低位を示して居るのである（全集）

ボザンケ氏のいはゆる

(7) 斯くプラトーンは絶対美の外、形式美、印刷美、模現美等の諸見
も来るが、且つ美は絶対の絶対美とみて始めて価値あるものと見なされける
まい。即ち彼等を之に於ける理想の模写であるのに美術の本質がある模写
の学にはあるのに彼はいつかそれでもよいが、之を主張の主眼の方位から見
ると併し茲にも強いしかしい是が出て来る。それは決して之の二つの
即ち絶対美を二つに分する模写[illegible]美と云ふ二つの価値は外部であるかとしれた凡て
[illegible]現実の美術は[illegible]模写美のであるが為に絶対美を現はす
に於てしては不完全なものである。我輩美術は甚だ不完全なものである

絶対美は絶対隔離、愛情、意識の美なり
(Symposium)

(8)

以上オ[illegible]号板の方面つづき見た事の方面[illegible]

プロトーンの板は二面つゞき有した板之丹まる。即ち甲は同じく第は丸まで

直ちに[illegible]だとしまして其は丸まる快でまるとしては同じく第は丸[illegible]上の知見

で観る[illegible]でく其[illegible]まるまは書[illegible]板的[illegible]即ち[illegible]高張でまると、前

者は其の形式[illegible]等に連なる故で後者は其の理[illegible]

此劇は感情の非理性的方面に訴えこれを利用して快楽しむ性なしむ性
て其の靈魂も之によって害せらるべしと云
料理、追放、[illegible]は性をとこに利用すれば正しき
而して其の快の地位の如何は問はぬ云々 (Forgiveness)

(8)

美に連なる点である。之れは世界文学の中でも重要の位置を占めるもの
美は快のあにすぎぬ美あるにすぎぬ、美的か其に当の力
つまるところ美的か抽象的かと問題の解決
で所謂プロトーンは両つ合に結合して美を生ずるものである
して二つの見方である。即ちプロトーンは快の弧
であるのであるが其は如何にしてあるか
(9) 快と苦と悲劇と云う方面に於ては
しかるに苦しみは快の二重になりでしプロトーンの弧
と限る点をもとし言葉にするオザンナ氏は其の快を pure なる
的の快として考えるものとして居る
に基く快楽に迷信と[illegible]
いまだ何ものも発しない二 (交流)
(10) 彼の上の二分者 (敵の全部を流) まとめ考えるのは Aristotle の中に

(16)

(11) 第二の段階はプラトンの説が相象説的、思惟的の他
の説明であるとの意味を含むものである。ただしこの段

(19)

~~綜合とも云ふべき~~哲理的のプラトーンの後を

分析とも云ふべき科学的のアリストテレース出づ。彼は適切に組織立てる

人にして何れの問題をも大成せしむる彼の為は其一面の目録の様で

科々と分かれて一系の学問となる。Physics, Politics,

Poetics, Rhetorics 等の類である。此中 Poetics が即ち我々の美学で

ある。但し此の書は其名の示す如く Epic, Tragedy, Comedy を統べて

論じて居るので芸術論の一部をも含む[illegible]。三に Rhetoric を加へて

しかる美学全体とは云へないが、外に Politics や Metaphysics を綜合する

必要がある。茲に於てアリストテレースは個々の学を統一し[illegible]

又存在せる科学的の興味が多い。プラトーンの哲理的の興味は稍け

(2) 乏しかった。目的論的世界の目的である。

アリストテレース美学研究の初とあり、之を提用するは自分の為の統[illegible]

[illegible]は[illegible]個の金に過ぎない知識の抽象作用の順序とされ[illegible]

(12) 統一[illegible]プラトンの合目的をもったのは[illegible]

[illegible]

形式[illegible]

了[illegible]

[illegible]

形式[illegible]

(13) アリストテレス Aristoteles (385〜322 B.C.)

(1) 彼の哲学はプラトンの反対と言ってよい。[illegible]

[illegible]

[illegible]

研究既刊のものに対して言葉にて左目せざる、図形作業等の進捗を称し、既中内容は信来長しく研究の取扱とせざるべからざるもの（内容は次号に譲る）を含んで居る事を穿鑿の結果に基き詳細に説明せしく注意を上ぐるのがやはり本誌の目的なれば本誌の主旨を設け中心となる論説雑報等の中心となし諸説を比較研究すること之れを眼中心とまりて

ではなるべく図形式人の模写を極力避ける方針にて図形式の模写は最も必要なる場合のみに限り本誌の主旨を貫徹せんとす

(3) 本誌の研究の目的は一言にして言へば

(21)

(2) 彼ら多くの作家の中並べるPathos は或は詩を万難の上に置き
或は上から或は叙事詩、悲劇、史劇の各方面から論じてきた
作家の方法に於て異なるが、其の中にも各時代の精神を捉へる
描写といふことは離れず、叙事詩も悲劇も喜劇も描写する
は描写であるといふことは冒頭を置いて一切の議論をも云ふまでもなし
ない、悲劇であっても喜劇であっても描写の事には

元来

先づ其制限の方面より説かんに彫刻に於ても繪畫に於てもはた音樂に於ても模寫といふ中には情緒氣分の模寫をも含まざるべからずとは前にソクラテース之れを唱へて後にプラトーン之れを就中音樂の上に應用したる説なるとは嘗ていへるが如しアリストテレース乃ち音樂と詩とが最も善く人間の心情を標現するものなるとを説きて傍ら他の造形美術例へば繪畫、彫刻、築建の如きをば殆ど心情の標現と關係し得ざるものゝ如く説けり。

ソクラテース、プラトーンに形を成せし模寫主義中の標現主義は、此に至りて美術中の一部に制限せられし觀あるを。アリストテレースの意に以爲へらく造形美術の心情を標現するは只人物抔の形を描き其態度、顔色等に依りて僅に之れを標示するに過ぎず音樂の如きは之れに反して必ずしも言語を待つまでもなく音調其のもの自身に心情の模樣と似たる所ありて直接に之れを寫出し得べしと。また其の理由を尋ねて「音調は言語なきも尚よく人間の情緒を通ず能あるべきものゝみ斯くの如くして他の色、香、味の如きは一も此の能なきは何故ぞや」といへるにて其の意を知るべきなり。要するにアリストテレースは此の點に於て一方プラトーンの

蹤を躡いで音樂の上に標現主義を認むると共に一方造形美術を其の以下に制限したるものといふべし。

アリストテレースの標現主義は此に止まらず。從來は一面に心情の模寫といふことを說きて純粹の模寫即ちありの儘の外形の模寫より一歩すると共に他面猶ほ舊來の模寫主義の地盤をば太しく離れ得ず僅に彼所此所より模型を寄せ集むるといふ外は現在の事物が依然として模寫の標準となり居たり。アリストテレースに於ても動々もすれば現在の事物を標準に取る希臘模寫主義の根本氣風をば脫却し得ざりしかど他の一面に於てプラトーンに見るを得ざる進歩を見はせる所彼れが美學の特色なり。其の一は醜の分子を美の要素に加入する端を啓けることなり其の二は美に現實の記錄たる歷史以上の價値を附して一種の想化主義の端を啓けることなり。此等固よりアリストテレースが直接に醜を加へ想化を說かんと心しての事にはあらざるべけれど說の結果は自然に斯くの如くならざるを得ず。アリストテレース以爲へらく詩人の心莊重なるものと經快なるものとありて莊重なるものは高上なる人物事件を模寫して悲劇をなし輕快なるも

のは缺陷ある笑ふべき人物事件を模寫して喜劇をなす。例へば顏つきの醜くして笑ふべきもの(厭惡の苦みを生ぜざるほどのもの)の如きは其の題目なりと。即ち醜きものも模寫する時はよく美術に入るべしとするなり換言すれば美を構成する要素としては醜の分子を加ふるを得べしとの論となる。美の構成要素中に醜の竄入を許すは近世美論の一大進歩にして又一大問題なり。されどアリストテレースは當時上にいふ如く意識して說を立てしにはあらざるべく只可笑しく醜きものも厭惡の情を起こさざる限りは美となるべしと漫然說き去りしものなるべく醜を美の要素とすとは今人の眼もて解釋せしに過ぎざるべしアリストテレースは單に此の說の端をなせりといふて可ならん。たゞ之れに伴ひて重要の問題となるは模寫といふ事其の事に美を作る力ありと見たる論なり即ち實物は必ずしも美ならざるも吾人之れを摸寫するに及びて美となるといふを其の意とす。此れまでは實物が美なる故に之れを模寫したるものも美なりとの論なりしを此に至りて模寫の力によりて實物以外の美を附加し得べしとせるにて、此の一點は明にプラトーン以上に歩を進めたるものといふべし。下にアリストテレー

スの言ふ所を引かんに彼れはまづ詩の起源に二ある由をいひ此の二源は人心の本然に由來するものなりとし其の第一は人間の模寫性にありとせり。曰はく模寫は人類の本具の性にして小兒より大人に至るまで人間の他の動物と異なるは此の模寫性あるに由る人間に始めて知識といふものゝ生ずるもの畢竟此の性の力によりてなり而して此の模寫により快樂を感ずることも亦た人間の天性なり。例へば吾人が模寫術によりて作りたる事物を觀る場合の如き其の物もし實物ならば厭惡の情なしにては視るを得ざらんと思ふほどの物も模寫物となりては模寫の度の精細なるだけ益〻快く感ぜらるる氣味惡るき動物の形、死體などに於ける皆此れなり。斯くの如くなる理は畢竟知るといふことに一種の快樂あるに由れり此の事必ずしも哲學者のみにあらず何人にも同樣なり只常人には知ることの範圍限られたるの差あるのみ。詳言すれば此に畫を見るとせんに其の畫中の像は嘗て他に見たる像なりと彼此の間に認識推量する所に面白味あるなりaはAを模寫したるものなるが故にaとAとの同一なることを味る所に快樂あるなり。故にもし美術が製作したるものにして全く吾人の知らざるものなる時は此れを推

して彼れを知る たよりなきが故に快樂は來たらず快樂ありとすれば其はたゞ細工色彩の下に快樂あるのみと。即ち之れを客觀よりいへば模寫といふことに美あり之れを主觀よりいへば彼此の類似を知る作用の上に快味ありといふに歸すべく又模寫といふ事は一歩すれば二物の類似といふ事に歸せんとする趣あり。但し此に知る作用といへる語は強ち今日の知力的作用其のまゝとは限られず單に此れの彼れに屬する關係を觀得する作用を汎稱せるものなれば此の一邊のみにつきて今日の眼光より解釋する時は內は理想といふ事を含みて一模寫物の理想に似たるや否やを判ずる謂ともなるべけれどアリストテレースの本意は斯かる點にまで立ち入れるにあらざりしと明なり。要するにアリストテレースには現實以上に想化するを美術の本意とするなどの者は未だ本わりし者と見るべきたゞ模寫といふ事の上に美の一脚を附託したる所其の効なり。即ち彼れの說は此の意に於ての想化論ともいふべく標準とする所は依然として現實物の上はれもしなり、一言以て捷つは實物の想化的模寫ともいふべきか模寫の業は斯くの如く主張せられたれど而も猶未だ標現主義の爲に全く撲寫主義を脫脚するには至

(4)

らずしも知るべき模寫といふ事に重きを置くは後の想化論の端を成せるものといふを得べし。尙ほ此の節の參考として注意し置くべきは彼れの詩と歴史とを對論したる一節なり。以爲へらく歴史は現に起こりたりし箇々の事柄を記述すれども詩は起こり得べき事また起こらざるべからざる事を記し得べし二者の差は散文と律語といふが如き外形上の別にあらず史祖ヘロドタスの書も外形のみは何時にても律語に改め得べけれど此れを以て直にヘロドタスを詩とせりとはいふべからず。二者の區別は前にいへる如く歴史は既に起りし事を記し詩は起こり得べき事を記する點にあり此に於てか詩は歴史よりも一層哲學的にして勝ぐれたるものとなる即ち詩の記する所は歴史の記する所の箇々的なるに比して一層普偏的眞理に近づき得ればなりと。此所にては其の起こり得べき事といふ點より見れば必ずしも現實を標準とせりとは斷じ去り難く現實以上の理想といふが如きものを認めたるにも似たり。されど亦た一方よりいふ時は此の論は畢竟劇の筋の統一といふことを說かんとして此に言及せるものなれば其の眞理といひ普遍といふものたゞ此の統一といふ形式を成就するの謂に過ぎざる觀あり

(5)

何とならば歴史にては必ずしも事に纏まりを付くるの必要なく起こり來たるまゝの事柄を記するも可なれど詩にては之れを纏めて統一し一團の形をなすの要ありとの義に近ければなり。

實感對美感　アリストテレースが實感以外に摸寫其の他に附屬する快感を說きしは前段に說ける所の如し彼は此の論據に立ちて佛程まで希臘美學の特色なる美感實感混合の見地を離脫し得たるか美感と道德的智力的肉欲的といふが如き感との關係を如何に見たるか。彼れの說は此の點に於ては殆ど首尾貫通せる定解なく場合によりて樣々に變するの嫌あり或は美感實感といふが如き問題は明にアリストテレースの心に上らざりしものならんか。或る場合に於ては彼れは美の要件は數學的關係の上にありといひ此の點より見れば美は善と區別せられ隨つて美感は實感より區別せられたるに似たり又或る場合に於ては彼れは美の上にて卑劣なる生活と高上なる生活とを對して論じたり此の點より見れば美は實用より區別せられてむしろ善と近寄らんとするに似たり。又或る場合にては彼れは人間の肉欲的好惡と審美的好惡とを討論したり此の點にては眞の美

と欲望に關係ある美とを區別したるに似たり斯く解釋さまざまにして一定し難けれども要するに美感と肉躰上の愉快は略ぼ明に區別せられたるが如し美感と道德感との關係につきてはアリストテレースの論甚だ明瞭ならず。上にいへる如く二者區別せらるゝかとすれば又之れを混して說く所あり殊に其の義を空釋して善なるの故を以て快きを得る底の善を美といふと明言せるに至りては遂に美と德とを混一するものなること爭ふべからず。更に彼れが美感と敎育上の感とを關係せしめたる點より見んに其の『ポリチックス』の書中敎育を論ぜる條下に於て繪畫音樂を論じ以爲へらく繪畫は決して商品の鑑定に熱せしめんとて敎ふるにあらず書生をして事物の美を觀察する力を養はしめんが爲なりと。但し單に斯くいへるのみにては敎育の中に觀美の要素を混入したるは明なれど未だ觀美の中に敎育の素を混入したりとは見ず。敎育の中に觀美の素を混入するは可不可は此に論ずるの要なければ略し逆に觀美の中に敎育の元素を混入したることはなきかと問ふを本論の眼目とすべし。此の點につきてはアリストテレーヌの有名なる悲劇論の題として下に評論せん蓋し彼れは音樂と劇詩とを以て啻に人物感化の敎育者と見做すのみならず又人心を清新にするの社會的任務あるものとすればなり。

『ポエチックス』の中悲劇を論ぜる條に其の定義を下して曰はく「悲劇は重大にして首尾完全に且つ適當の大さある一作業の模寫なり其の語は洗鍊して快味あるものを用ひ部分の殊なるにつれて種々の手段を施し物語り躰ならすして動作に演する方法を取り哀憐と戰慄との情を刺激して我が感情を洗淨するの効を成す。此に快味ある語といへるは律調等の整へる語をいへるなり。又部分の殊なるにつれ種々の手段を施すといへるは或る場合には平仄のみを用ひ或る場合には調子のみを修むるの謂なり」と。又悲劇の成立する各部分を數へて六とせり、脚色、性癖律語、感想、裝飾、音樂是れなり此のうち最も肝要なるは脚色に如くなしとし思へらく「悲劇は人物の模寫に非ずして作業の模寫なり幸不幸の人生の摸寫なり。蓋し人世の幸福は作業の上に成る人生の目的たる至善は一種の作業なり性質にはあらす。人の性癖といふが如きものは唯其の人物性質を表するまでなり人の幸福なるは其の作業の然らしむる所性癖の如何には由らす不幸も亦た然り。故に

悲劇は性癖を寫さんが爲に作業を寫すにはあらす作業を寫せる中におのつから性癖の含まるゝなり作業隨つて脚色は悲劇の目的なりといふべし」と。又曰はく「悲劇は啻に完全なる作業の模寫たるのみならす亦た戰慄と哀憐との情を刺激する作業の模寫たらざるべからず」と。又曰はく「運命を榮より枯に轉ぜしむるは德ある人物の上に於てすべからず何となれは斯かる轉變は人の戰慄哀憐の情よりもむしろ厭惡の情を惹く恐あればなり。又之れに反して枯より榮に向かふ運命は惡人の上に見すべからず云々。此等は啻に道德心に於て滿足なきのみならず感動すべくも戰慄すべくもあらねはなり」と。又曰はく「性癖は或は科に或は白に其の人の傾向を示すものなり而して其の傾向の善惡によりて人物に善惡あり中にも此の習癖の善なる面は如何なる種類の人にも見出ださる婦人の習癖は多く惡に傾かんとするもの奴隷の習癖は全く惡に傾けるものなれど而も尙此等すら善なるを得べし」と。此等の說によりて見るも、アリストテレースにありては道德心の滿足即ち善といふことか如何に密に美感と抱合して存せるかを知るに難からざるべし。

前述美感と敎育との關係につきては最初に引きたる悲劇の定義の末節を議論の焦點とすべし。試に件の定義中主要なる語に解釋を下さば重大といふ中には高尙といふ義を含みて叙事詩と共に事件の賤劣ならず醜惡ならざるべきをいへるなり此の點に於て悲劇が夫の喜劇及び諷刺の賤劣醜惡なるものを題とし得るとは異なるを見るべし。首尾完然といへるは全躰の結構に首あり胴あり尾ありて有機的統一をなさゞるべからすといへるなり假に之れを筋の統一ともいはゝ外に時日の統一、場所の統一を合はせて今の所謂三一致といふか如き考は未だアリストテレースには確と存せざりしに似たり只悲劇中の事件は一日内外の事に限るべしとは說きたれど固より三一致を說かんとするなどの下心にはあらざりしなり。適當の大さといへるは美なる事物は全躰としても各部としても容易に會得せらるゝほどの大さならざるべからずとの趣意なるべく洗錬して快味ある語といひ種々の手段といへる意義はアリストテレース自身の說明にて明瞭なるべし。科分にて演ずといへるは悲劇と叙事詩とを區別せるものなれど又讀み物としても悲劇の美を味ひ得べきことは否まざりしが如し。只終りに戰慄と哀憐と

の情を戟刺して感情を洗淨すといへる一點はすなはち論の集る所にして觀美と教育との動もすれば混合せられんとする所なり。感情を淨むとはそも〳〵何の謂ひなるかアリストテレースが用ひし原語 κατάρσις kaθapsis にはさま〳〵の義ありと見るを得べしレッシングは之れを純潔ならしむとの義に譯し感情を制して道德心に歸せしむとやうの意と見なせり――テーゲルは純潔ならしむとの譯語を襲用して別に適當の意義を之れに附加せんとしき思ふに此の語の本意は人の戰慄哀憐の情に激しく動かされたる後靜平の情に復して心地すがゝしくなるの謂なるべきか。『ポリチックス』の末音樂の効果を論ぜる條に音樂が人心を淨むといふことを說いて以爲へらく人が恐怖其の他激しき感情に制せられし後には靜平に復するの快味あるものなり「是れと同じ方法によりて人心を淨化する力を有する凡ての音樂は人に無害の快樂を與ふ」と此等の言に徵するもアリストテレースが淨むといひ純潔ならしむといふの眞義は上述の如きは過ぎざるに似たり。果たして淨化の義斯の如しとせば之れと敎育とは關係なしと見るを得べし即ち一旦過激なる感情に沈めるものを靜平の狀に還らしむること

と〻人を教訓し指導することゝは全く別なればなり。要するに感情を洗淨すといふ一語の解釋次第にてアリストテレースが悲劇の興味は美的か教訓的かの別定まるべきなり。

抽象的對具象的　オリストオレースが美を解する方法とわきては是れまた『ポエティクス』中の悲劇に大要を見るを得べし。前に擧げたる悲劇の六要件中脚色と性癖との二件及び此の二件の關係は即ち此の冊頭の標目たり。彼れが此の六要件中脚色に最も重きを置き性癖は到底脚色の從たらざるべからずと說ける中世期に述べたり。是れに由りて見る時はアリストテレースの說は今日の美學者が美は個人個物の特性を描く所に存すと說くとは正反對にして事件の進行統一等の爲には個人の特性は犧牲となることあるも已むを得ざる次第と言はざるべからず。換言すれば脚色結構の面白みといふか如きものを先きとして個人個物上の面白みを後にすること即ち一層抽象的なる美を主とし具象的なる美を從とするとアリストテレースの本意なりしに出たり。されどこゝに注意すべきは彼れが性癖といへるは果たして今謂ふ所の個人個物の特性即ち個性といふが如きもの

なりしか否といふことなり。彼れが自ら性癖を解して其の人の傾向若しくは類を示すものといへるに由りて案ずるも此の語にはむしろ其の人の善人惡人といふが如き道德的品類を主とする意籠れるに似たり即ち極めて抽象的模型的なる人物の性質を性癖といひて之れと脚色とを對せしめたるものアリストテレースの眞意なるべし。如何に脚色結構を先にすればとて其の脚色結構ある事件の根元たるべき個人を殊さらに取り出でゝ排斥することゝ餘りに不理なるが如き觀あれば なり。蓋し一事件の變化統一等を先にするに當たりては其の事件中の人物善人なればとて必ずしも善事のみを爲して事件の脚色を顧みざるも可なりとは言ふべからず。要するに模型的人性と脚色とを對して後者に重きを置けるものといふべし而して模型的ながらも更に角個人を擧げて之れを事件の後に置く點よりいへば比較上到底抽象的見地にあるものといふの外なきなり。又個人を說くにも其の個性といふが如きものに見到らずして善人惡人といふが如き漠然たる性癖に止まりし所愈其の朱だ純然たる具象觀に達せざりしを證せずばあらず。されど斯く明かに脚色と性癖とを對舉して論ぜし所少なくとも其の論法乃至着

眼の點に於てアリストテレースに一段の進歩あることは固より否むべからざるなり。其の他彼れは脚色に重きを置くと共に脚色の部分統一などいふことに重きを置けり。其の意に曰はく脚色は全き一團の姿を成さゞるべからず事件の上に統一なかるべからず又相當の大さありて人の了解に適せざるべからず美は凡そ大さ及び秩序より成るものなればなりと。

以上の外アリストテレースの說として注意し置くべき諸點を其の詩論中より下に拔萃せんに其の悲劇を作る實際の技術を論ずる條に以爲へらく詩人が悲劇を結構し又書き下すに當たりては及ばん限り彼れの身みづからを觀者の地に置かざるべからず斯くして始めて其の作を目のあたり實演するが如く明に適不適の箇所を發見し得べければなり。又詩人は勉めて實演者の地に身を置きて作せざるべからず何となれば實に喜怒するものほど他の同情を惹くこと强きはなければなり。又詩を作るには才の敏慧と狂氣に近き熱情とを有せざるべからず敏才は以て諸事物の形を模するに足るべく狂熱は以て其の想像する所の者に身を化するに足るべければなり。又詩人の作するに當たりては第一に其の荒筋を仕組

み而して後其の各部に小話をも附加し本節をも廣げて完全のものとせざるべからずと。次に悲劇の種類を論じて複雜なるもの單純なるもの悲慘なるもの道德的なるものとやうに分類したれど此の說は甚だ審ならず。次に敘事詩と悲劇との關係を論じては種類に於ては悲劇と同じく分類するを得べけれど差點は第一脚色の長さ及び律格の用法に於て敘事の方自由なり第二悲劇にては僅に事件の生起上觀者に驚愕の情を生ぜしむるを主とすれども敘事詩は一歩を進めて事の神怪不思議に駭神驚魄することあるを妙とすと。

以上アリストテレースの學說中最も注意すべきは(一)摸寫を人生の本然に本づけるものとし且つ此の事自身に快味ありとし(二)模寫に入れば醜惡なるものも美なるを得といひ(四)美には秩序あり大さあるを要すといひ(五)觀美の結果は人心を淨化するにありと說き(六)詩と音樂とを貴びて實在物以上のものをも模寫すべしと說き(七)悲劇と敘事詩とを細論したる點等なり。

第六　アリストテレース以後の希臘美學

アリストテレースの死せる頃まで即ち紀元前凡そ三世紀の頃までにて希臘哲學の最盛期は終はり是れより後紀元第六世紀の頃までは希臘哲學漸衰の時代と呼ばるゝを常とす。隨つて此の間には美學思想の見るべきものも尠しとせず通例希臘哲學最後の花といはるゝ新プラトン學派に於て稍〻目ざましきものあるのみ。アリストテレース以後の哲學には懷疑學派ストア學派エピクロス學派等ありたれど此れ等には美の論と見るべきもの少なし此れ等の學派の後に數ふべきものは上にいへる新プラトーン學派にして希臘哲學は此の派に打ち止めとするなり。蓋し懷疑派ストア派エピクロス派など多くは極めて偏したる學說にしておもに人間の世に安立する道如何といふ點より立論したるもの、隨つて其の結果は極めて實際的に安立の道はたゝ寡欲にあるのみといふが如き修身學の範圍に局し想像の上に美の實躰を認むといふが如き地には優遊し難かりしなり。新プラトーン派の學說は是れに反して頗る宗敎的神秘的の性を帶び審美とはおのづから緣の密なるものあり是れ其の派中にプロチーヌスを出だして希臘美學の最後期を飾りし所以なるべし。

ストア學派の凡神敎的なる邊よりして始の程は多少審美の方面にも論を立てた

るものあるに似たれど固より精しきものにはあらず。紀元前三世紀の人なるクリシッポスは自然美に關して思へらく多くの動物は造化が之れを美ならしめて樂まん爲に造りしものにして其が樣々の色どりの如き即ち是れなり、孔雀の羽の美しきなども此の例なりと。されど斯かる說は次第に跡を絕ちて後には終に全く美術を庖厨の業と同一視するに至り美などいふことには目を着けずひたすら實際の方面より安心修業の道如何と考究するに及べり。美術をば上述の如く全く機械的なる料理なんどの術と同視したると共に哲學に重を置き唯一の自由なる藝術ともいふべきは哲學なりとし詩の如きも哲學に資するものだけ取るに足るといへり。此れ等の說には緩急の差こそあれ多少プラトーンの說の片影を傳へたるを見るべし。

エピクロス派の所見はストア派と反對の面より發し而も其の結果に於て合する所あること其の哲學の傾向なり。されば美論に於ても始より美といふものゝ價値を認めず。ピロデモスは音樂を以て不合理のもの隨つて人の精神情緒を動かし得ざるものとしたゞの庖厨の業と大差なしとせり。此は美術には元來合理的

なる人心を滿足せしむべきものを含まずと見るものにて夫のプラトーン、アリストテレース等が音樂詩歌に高尙なる人心を發揮し得べしとせると正反對の見也。又詩人ルークレチウスが人は唱歌を鳥の囀る聲より學び音樂を葦の葉渡る風より學べるものといへるは美術が自然美よりも價値なきを知らず〳〵の間に主張せるものなり。

此の外懷疑學派等につきては言ふべきほどの事なし。要するに上の二派といへども美論としては聽くに足るものなくプラトーン、アリストテーレス等の深奧博大なる學說とは比すべくもあらざるなり。

第七　諸評論家の說

以上の外必ずしも何れの派に屬したる哲學者といふに非ざる諸評論家の說中多少注意すべきものを摘記せん。羅馬時代となりざる前即ちアレキサンドル時代の文藝批評家としては紀元前三世紀の頃のアリスタルコス及びツオイロス等ありたれど此等は畧して羅馬時代に入らんに詩人ヴィルギル及び前に擧げたるルークレチウスに多少の美論めけるものあり、されど夫の雄辯家として名高きシセロ以

下ロンギーヌス、プルタルクヂ、オクリソストム、プロスッラトス等の説に却りて羅馬時代の美論中注意すべきものあるを見る。但し羅馬時代は政治法律に榮へて文藝學術は希臘の盛に及ぶべくもあらざりしこと人の知る所にて隨つて美學の如きも多くは前人の説を援引し紹述するに止まり自ら深く思索發明する所は少なかりき。下にはたゞ諸家の説中主要の點のみを摘記すべし。

シセロ(Cicero 106–43 B.C.)の説として記すべきもの第一は其の眞摯熱心なる學者として廣く前人の説を研究せるが中にもプラトーンの審美説を部分と全躰との關係といふが如き形式説と斷ぜるもの長く後世學者の同意し準由する所となれること是れなり。第二には美術と理想との關係上プラトーンの説などより稍〻一歩を進めたる見を抱けることなり。其の意凡そ世界の事物にして此の上はなき極頂の美といふが如きものはあることなし何となれば眼耳其の他五官に得上らざるものにして心能く之れを解し容子能く之れを表出するものもあるべければなり。或はフヂアスの刻める彫刻物或は其の他の繪畫の何程逸品なるものありとするも吾人は尚其の以上の美を觀じ得べし。フヂアスがヲユピタル又はミチル

ヴの像を刻むに當たりても其の標本を眼前に置きて之れを寫せしには非ず寧ろ心に美の理想ありて其が斷えず彼れの手を取り導き其の妙作を成さしめしなり。斯くあらゆる物形に肉眼もて見がたき圓滿の妙趣あると同じく演説の如きも啻に耳に聞ける所のみならず心には演説の理想の美を觀得べしと。因にいふ演説が美術の一部と認められしは羅馬時代の特色なり。第三には美の種類に關する感得力漸く微細に赴きたること此の時以前には見るを得ざりし現象なり即ち後世審美論中の一要部たる崇高と美麗との二美の別始めて此の頃より識られ初めしを見る。シセロ曰はく「美に二種あるを見る其の一は美麗より成り他は莊嚴より成る美麗の美は女性といふべく莊嚴の美は男性といふべし」と。蓋し斯かる着眼はアリストテレースにすら僅に其の美術を分類せし點より推して多少其の傾きありしかとも見る外之れあるを得ざるなり。またシセロの論固より精とも妥ともいふにはあらねど兎に角美感の次第に鋭敏になり行けるは爭ふべからず。降りては此の莊嚴の美即ち崇高美につきて論を立てたるものをロンギーヌス(Longinus 210-273 A.D.?)とす。其の崇美論は崇高美其のものゝ解釋と

して固より未だしき所あるを免れずと雖も之れに對する觀察力は具はりたりしこと其の書を讀みて知るを得べし。また其の廣く古詩文古美術を引例して一々に實例につき批評し分析して論ずる所讀みて面白し。要するに此の論斷案に取べきもの少なしとするも當時次第に美の各方面に對する感納力の緻密鋭敏となり行けるを證して餘あり。さて其の崇美の說に以爲へらく崇高とは精靈の偉大になれる像を謂ふ。造化の愛兒たる吾人をして庸劣ならしむるは造化の趣意ならず寧ろ造化は吾人に生命を與へて全宇宙の廣野に置き造化の大事業を見もし亦た之れを競はん志望をも起こさしめんとす。されば吾人の精靈には一層大なるもの一層神的なるものゝ凡てを獲んと望む不撓の熱心植ゑ附けられたり。人の思想をして思ひのまゝに翔らしめんには全世界も廣からずして往々其の限界外に逸することあり。人生の全圏を觀測すればあらゆる高雅偉大美麗なるものに行きわたらずといふことなし以て人間生存の眞目的の何邊にあるかを知るべし。即ち造化が吾人に水澄み便利なる小流よりもむしろナイル、ダニューブ、ライン又は大洋の壯大なるを喜ぶ性を賦せし所以此にありと。されど細に討究する時は到底崇高美といふものゝ性質を此所と悟入し定說したるものとは見えず「一事にして多量の感慨を含み人の注意を之れより引き去ること殆ど出來ざるまでに永く強く記憶に留まるが如きものなる時は吾人は此所に眞の崇高美に接すべしなどいへる所より察すれば一事物の强大なるものに對して人の心が尋常以上の精力を費さゝるを得ざる時其の人心の活動反動等の上に崇高美は宿ると見しに似たり。また其の崇高美の五源を數へたる言に曰はく「第一の最も有力なるものは思想の善く奔放なるにあると轟ヒクセイフ、ゲーン論に言へるか如し。第二は厚くして熱したる情の力あるを要す而して以上第一及ひ第二の二件は概して天賦のものといふべく以下の三者は多く術に屬せるものなり。第三は詞姿の巧に作らるゝことにて是れには感と辭との二面あり。第四は表白法の高尙優美なるにあり是れには啻に語を感深き高雅のものとするのみならず譬喩を用ひて文致を修錬するの要あり。第五源は以上の諸件を包含するものといふべく文句の及ばん限り威嚴ありて高大なるものとするを要とす」と。此等の諸件は未だ以て特に崇高美の源を說盡せりとはいひ難かるべし。また文致の事を說き進みては遂に

不完了といふと崇美との間に關係あるが如く說けり此の着眼は後のカントの說の一要部となりたれどロンギーヌスにありては深く考究するに及ばざりき。要するに彼れの說は哲學的深邃の見地に乏しといへども崇高美といふ種類の美中に存することを益〻明にしたる點に効わりといふべし。

プルタルク(Plutarch 50—100 A. D.?)はストア學派をもエピクロス學派をも難じて自己は此等の何れの派にも屬せずとする人なりされど其の說には例によりて哲學的創見ありといふにあらねど前人に其の端を啓きし審美上の問題を最も明白平易に提起せる點注意するに足る蓋しアリストテレース以後年處を經ると共に美術賞翫の經歷漸く豐になりゆきて問題の肯綮おのづから明に心に映つるに至り心結果なるべし。さて其の提起せる問題中「實物として醜なるものか美術に入りて美となることを得るか」といふか如き必ずしも新しき疑問にはあらねど而も其の言ひ出し方は頗る直截明快なり。されと亦た外見の之れと似たる問題を起こして「美術上にて歡美する事物は其の故を以て道德上にも褒むべきものといふを得べきか」といひ而して之れに然らずと答へたるか如きは縱令其の答は正當なり

とするも純粹なる審美上の問題にはあらず審美と道德とを混同したるものなり此の點に於ては依然たる希臘美學の舊態を脫せざるものといふべし。さらに其の明白なる言葉を以て醜と美との關係の問ひ究むる所見るべし曰はく「本來醜なるもの能く美術に入りて美なるを得るか若し美なるを得とせば、さる美術品は其の原物に適合し又は原物と兩立すべきか。又若し美なるを得ずとせば何故に吾人は斯かる美術品を歡美するか」と。而してプルタルクが之れに對する答案に以爲へらく醜其のものは到底美なるを得ざれど模寫といふことは其の模寫の巧なるだけ歡美せられん。醜なる事物の繪は美なる繪とは言ひ難し何となれば其の繪にして美ならんには其の原物の醜と不適合又は背馳すべければなり。元來美と美しく模寫するといふ事とは全く別なり。吾人が繪畫詩歌などの美術中に見えたる醜事物を歡美するは猶小兒が犬張子の類の翫具を喜ぶが如く美術家の錬才と我れの認識力との吻合する所あるに由ると。認識力といふものを美と關係せしめしはアリストテレースにも見ゆる說にして觀美力を分析する上の一段の進歩には相違なきも我れの認識力と美術家の熟錬と相關せしめたるまでなるは

依然たるアリストテレースの見地にして此所には未だ美術家の認識力と美術に入るべき事物の眞體との間に關係あるを見ざるものと謂ふべし。即ち論者の意に從へば吾人が五官にて直接に自然界より感じ得たる所と美術に於て感じ得たる所とは全く相同じ美術家の心手を通過して出で來たる事物といふとも自然のまゝと何の異なりたる所なし美術家が認識力をもて自然のまゝ以上の或る眞髓を其の事物中に認めて之れを描くといふが如き意は此所には存せざるなり。ただ自然物と美術品との殊なる所は一は自然一は人工といふことを比較識別する所にあるのみ要するにプルタルクは未だ醜の模寫の何故に美なるか又人は如何にして認識力を美術上に適用するか等の問題に明なる解釋を與へ得ざりきされど其の此等の題意を多少明にせし効は認めざるを得ざるべし。

ヂオクリソストム (Dio Chrysostom A.D. 50—117) の說に注意すべき點二あり。第一、彼れはシセロと反對に美術の理想を具象的に認めんとする傾あり。美術の理想といふもの是れに形を與へて實現せしめざる限は漠として取りどなきものなりと。故に其の結論はフヂアスのヂウス神の彫刻を見たる後といへども人は尙能く一

層美なるものを想像し得べしといふ說に反して一度此の彫刻を見たる後は何人が如何にするも此の同じ神を他の形に想像することは出來ずといふに到る。即ち單に一層美なる物といはずして美なるヂウス神と實形を指す以上は此の形は一旦前人の手に現せられては他人之れを復びするを得ずといふなり。第二、詩と造形美術例へば彫刻繪畫との間に區別あることを論じて以爲へらく「彫刻者は凡ての肖像を唯一種の態度にあらはす外なし即ち其の現す所は固着して變化せざる容貌の如きものにて、神を寫すといふにも件の一容貌態度中に神たるべき凡ての性質を現ぜざるべからず。之れに反して詩人は其の詩中に雜多の形を有し且つ運動、靜止、作動、言語を其の人物に賦するを得べし」と。詩を造形美術よりも遙に自由なるものとせる意明かなり。以上の二點は美學上價値ある創見といふべし。

フロスツラトス (Philostrans 三世紀の上半頃の人) にも亦た二の注意すべき要點あり。第一、模寫と想像とを區別し對立せしめたる所最とも注意すべし埃及人が神を動物の形に現はしたるを希臘人が難ずる躰の問答に先づ埃及人口を開いて「如何にして希臘美術の現じたる方が埃及のよりも眞正なりと知り得べきかフヂア

スとても天に上りて神の像を寫し來たりし譯にはあらじ或は他に何物かありてフヰヂアスの作を指導すといふにや」と反詰せしを希臘人答へて「いかにも他に何物かありて之れを指導す智慧充分なる何物かの指導あり」「其は何物ぞ恐らく模寫といふものゝ外はあらじ」「模寫よりも一層敏慧なる想像といふものあり模寫は見し所を寫すに過ぎざれど想像は未だ見ざるものをも描き得べし」と。第二、件の模寫と想像と相乖離するは未だ十分の境にあらず二者はまた和合して想像的模寫を成し得べし雲中を行く獸を描き白墨にて黒人の顔をも描き得るが如き此の例なりと。されどまたプロスツラトスは想像的模寫と想像との間にも區別を附し想像は全く創作する力なりとせるに似たり。また其の創作はおのづから智見感情に適合するものならざるべからず棕櫚の木の雄雌川を挾んで枝を交はせるさまなどは感情あるものなりとせり。されればアリストテレースが單に理想的模寫を說いて如何なる方向に理想的ならしむべきかを詳にせざりしに比し此の想像的模寫說は幾分か歩を進めて想像的とは現實より拔んでゝ感性を含み智見に合するよう創作する所あるを謂ふの意となれるを見る。

(八) プロチーヌス

(1) プロチーヌス (Plotinus 205—270 A.D.) の哲學は新プラートン學派に屬するの故を以て隨てプラートンの說に本づけるもの多く根本に於ても天地を靈と物との二大部と觀、前者を上とし後者を下とする傾あり又此の靈を識るには我れの智見も高尙にして直觀的のものならざるべからずと。之は此の見地より出でたる彼れの說を標現論の方面より說かんに前にもいへる如く物は靈よりも劣等にして現實は理想よりも小に造られたるものは造るものよりも小なるべきは彼が哲學の根本思想に於ける必然の結論なり。即ち此の點に於て彼れがプラートンの脈を引き進化論よりも寧ろ分出論を以て此の現象世界を解釋せんとするものなるを見る。されど現實界は理想界よりも劣等なりといふの故を以て直に美術を取るに足らざるものとするは非なりとし以爲へらく「人若し美術は自然の模寫なるが故に取るに足らずと云はゝ吾人は云ふべし自然物も亦た一層深奥なる或る物の模寫のみとしかのみならず注意すべきは美術は單に目に見ゆるものを模寫するに止まらで自然が淵源する所の理想 (Λόγος) 其のものにまで溯り寫すものなること

なり。また美術はみづから或る美なる事物を創する力を有し此れによりて缺けたるを補ひ完うすることあり。フヰヂアスがヂウス神の像を刻めるも目に斯かる模型を見たりしにはあらずただヂウス神若し下界に降らば斯かるべしと思へる所を作れるのみ」と。此所には美の本躰を一種の靈にありとせる意見えて依然プラトーンの色を帶びたるを見るべしされど亦此れと共に物體に現はれたる自然の美をも捨てざる點よりいへば靈と物との兩元に脚をかけたる氣味あり。要するに「美なる物は神より出つる理想を賦せられたるものなり」といひて物と靈とを合せんとするは其本意なるべし。また美を觀る力を說いて前に理を物に寓せる同じ心のみ能く美を認め得べしとし以爲へらく「見るものは之れを見る前に先づ見らるゝものと同類ならざるべからず。眼は先づ太陽の如くならざれば太陽を見得ず。心はまづ自ら美ならざれば美を識る能はず。何人も神に近き美を觀んとせば之れに先だつて心性を神に近きものとすべきなり」と。此等の點より云ふ時は、プロチーノスの說は明に希臘美學の通色たる模寫主義を脫して理を物と寓すべしといふ抽象的なる標現論に入りしものなるを知るべし。模寫主義といふ

うちには常に現實物其のまゝを美の根基とする意籠れること既にしばしばいへるか如し。プロチーノスが現實も等しく理躰の模寫に過ぎず美の本源は此の以奥にあり美術はよく直接に此の本源に溯るべしといへるは模寫論を離れたるものなること言ふまでもなかるべし。

美感論にては、プロチーノスの說、明瞭なり。彼れはアリストテレース、プルタルク等の如く單に美術家の模寫の才能といはずして寧ろ美なる物其のものに對する觀者の心の吻合を觀美心の狀態としぬ。詳言すれば此の吻合はやがて理と之れに適する形式とを我れにも具して彼れ此同類の故を以て相吻合する所に觀美の味生ずるの謂なり。蓋し美といひ醜といふは理の形式が其の物に被らされしと否とによりて分かるゝ名にして此の形式はひとり吾人の直覺力によりてのみ會せらるべし。プロチーノスは此の論據に立ちて美を全く理的形式といふが如きものとし五官界の物に對する欲望以上とせるが故に隨つて此の方面にては美感と實感とは截然區分せられたり。また斯く一方に於て從來脫せんとして脫し得ざりし道德の羈絆を脫却すると共に美はたゞ理的形式の上にありといふに重

きを置ける結果は後の假象說に似たるものゝ端を發せんとせり。要するにプロチーノスに於て希臘美學は漸く道義學と幷行し敢て之れに制せられざるの地に達せりといふを得べし。

(8)

假說よりいふも日常見たるまゝの事物を模寫の基本とする說破れたると共に變化の統一といふ空なる形式美は斥けられたるものといはざるべからず。プロチーノスはしば〳〵美と均整といふことゝの同義にあらざるを辨じて思へらく「美はむしろ物の均整なる面上に落ちたる光にあり均整其のものにはあらず物の美しきは此の光によりてなり。見よ何故に美の光は活きたる顏にのみありて。死人の顏には縱令顏の均整は損せざるまでも僅に美の痕迹を遺すのみなるか。また何故に他の一倍均整なるものよりも活如の相ある彫像の方一倍美なるか。また何故に美なる彫像よりも醜なる活人(有要善良などいふ理由によりて活人を要するは固より別なり)が一層美なるか」と。彼れが抽象的なる形式の美より一歩したる意は之れによりて瞭々たり勿論此所は彼れが均整統一などの形式美を斥くと共に生氣表情といふが如きに重きを置く傾見えたるは此れのみにては等

(4)

しく形式美に近き弊なきにあらず未だ十分なる具象美に着眼せりとはいひ難けれど從來の形式說に比して一段の進歩なるは爭ふべからず。

また斯く形式美を排して均整もし美ならば其の中にありて一分〳〵を成せる元素は遂に均整を成すに由なきが故に美ならざるに至るべし然るに凡そ均整統合して美を成せるものには一分〳〵として美ならざるものゝ存すべき理なきにあらずやといへる如きは問題提出の効はあれど精確の論とはいひ難し。美なるものゝ一分〳〵には必ずしも美ならざるもの存するを妨げず。また一分〳〵といふ中にも更に幾多の部分ありて均整を成せるか計られざるなり。また其の自ら單一なる光の美を說明して「色の如き單一のものも其が靈的理形といふ原則によりて暗黑を光被する所に美存す」といへる如きは不完全の說明といはざるべからず。此等の難點は措くとするもプロチーノスは光線の美を說明するに力を入れて却りてアリストテーレスが遺したる音樂といふ好題目を二の手に置きたりしに似たり。其の光線に重きを置きしはプラトーンが善と太陽とを對したる餘響ならんといふ。また醜を說いて全く理形なきものとせるは誤謬の見なるべしと

いへども而も此れに關しては今日猶ほ繰り返し論義せらるゝ審美上の大問題あり。全く理形なきものはあるべからざれば其の度に從つて高等なるを高等の美とし劣等なるを劣等の美とするか此所にては絶對に醜なるものは存せざるなり。或は理形を現じたるものは凡て美なりとの根本を變じて醜となるべきものに制限を附するか或は理形といふ意義を變じて始より理なき形の成立を許すか。此等は近世にも亘れる問題なり。

是れを要するに(一)美の本源は理想にありとし(二)物は此の理を宿すによりて美なりとし(三)美はたゞ此の理の形の上にのみ存すとし(四)隨つて欲望善などゝは明に別なりとし(五)之れを觀るは我れの直觀智ならざるべからずとし(六)美術は直接に自然の根源たる理を寫すが故に自然の復寫にはあらずとし(七)均整統一等の形式は美の本來ならずとしたる所プロチーノスが美論の要目たり。

此の後餘年まで希臘哲學の命脈は存して最後の希臘哲學者ともいふべきプロクロスはプロチーノスの美論を研究し組織したれど遂に新思想の之れに加へたるものあるを見ず故に此には詳述せざるべし。希臘美學が如何に模寫論實感論抽

象論より發展して標現論美感論具象論に達せしか又其の標現論美感論且象論に希臘美學の特色は猶存せるかは上來の說によりて略ゞ知るを得ん。次意には中世美學の一斑を述ぶべし。

第三章　中世の審美説

第一　總論

哲學史上中世と稱するは第三世紀希臘哲學の頽敗後より第十六世紀のはじめ佛の哲學者デカルトの出づるまで凡そ千二百年間にして、更に之れを細別すれば第四世紀より五世紀頃まで教父時代と稱し其れより第九世紀頃まで暗黑時代と稱し第九世紀以後をスコラ哲學時代と稱す。蓋し教父時代にありては基督死してより二三百年其の教の漸く轉傳して一ならざらんとするを見て教會の諸教父等が相會し基督の教義を議定せんとせるものにして、教父時代また教義制定時代ともいふべく暗黑時代にありては羅馬教會が北地方の未開の人民を盛に其の教に歸依せしめんと勸化に力めたりスコラ哲學の時代には曩に一定したる教義を哲學上より説明し理論に附會せしめんとせるにてスコラとは此等の哲學者が教會學校に在るの故を以て名つけしなり。是れたとへて觀るに中世哲學の全景は全く宗教的なりきといふを得べく哲學といふも實は其の背景として常に基督教を離れ得ざりしなり。されば中世は基督教の勢力が學問界を風靡

せし時代にして宗教的倫理的なるもの以外の學問は多く十分の隆盛を致し得ざりしことを怪むに足らざるべし。美の研究の如きはた此の影響を受けて中世の審美説は到底希臘時代の盛なりしに比すべくもあらず下には其の主要なるものゝみを概説すべし。

プラトーン學派の説がプロチーノスを通じて基督教哲學に幾多の影響を遺せることは明なり。即ちプラトーン哲學の根本思想として靈と物との二面を立し物界は一段高遠なる靈界の模寫なりとせるは中世の思想にも離れざる特色なりとす。此の點に於てはプラトーン以前の希臘思想が自然のまゝ以外に靈といふが如きものを認めず所謂自然的一元論なりし類とは異なり中世哲學はまた靈と物との二元を見たりといふを得べし。たゞ基督教にありては根柢に於て物より靈の一元に歸入せんとする精進の傾向あり二元は其の外皮なりしを見るのみ。されは美術も亦た畧〻プラトーン學派に於けると同しく靈を標現したる範圍に於て價値あり美術と自然と共に靈界の模寫たるをは免れざるなり。また此の物界の一面なる美術と自然とにありては初め自然のかた術品よりも貴まれ中ごろ彼

の基督教の偶像打破主義につれて益々術品は神を標するに足らずとする思想盛になり後遂に自然も術品も等しく靈界を標現するに於て美たるの價値ありとせらるゝに至れり是れ中世美學の趨勢なり。

第二　アウグスチーヌス

アウグスチーヌス(Augustinus 354—430 A. D.)の說として記すべきもの第一は變化の統一といふ形式美の意味を少しく變じたること第二は此の主義を全宇宙の上に應用したると第三は色の美を重んじたることなり。彼れ初め『美と適宜』といふ書を著はして美の事を論じたりとはいへど其の書は早く佚して傳らずアウグスチーヌス自らも甚た此の書に重きを置かざりしに似たり。隨つて其の審美上の主義の如何なりしかは今日之れを知るを得ずといへども其書右の示す所によりて察すれは矢張り均整統一などいふ形式美の說の範圍をば脫し得ざりしが如し。今彼れの美に對する說を按ずるに單に變化相つらなりて統一を成すにあらずむしろ善惡黑白といふが如き全くの反對者相對立して始めて全躰の美を成すと。而して其の例として世界には害毒を含むものも種々あれと此等はずべて全世界

の美を助成する一部として必要なりといへり。宗教道德の上より見て斯くの如く害毒罪惡の類を當然存在すべきものとする見の果たして許さるべきものなるか否かは別論なれど審美上美の成分要素として美の直反對なる醜の竄入を許したるは一大進步にして近世思想を豫表したる趣あり即ち美といへば徹頭徹尾美なる材料のみより成ると解せし從來の見を超えて美と醜と結合する所に一段高等の美を生ずとする近世の美論と相通ずるなり。此等の見はアウグスチーヌス以前に無かりし所にしてプルタルクが只技藝家の技倆を示す料として醜を作り試みる外美術には醜の入るを許さずといへるなどゝは頗る殊なる見地にあるを見るへし。されはまた只管美なる材のみによりて美を結成すべしとせる謂はゆる單調なる審美見に對し之れに醜の分子をも加味して個々特有の趣致を發揮せんとする審美見は一層抽象的形式的なるものより一層具象的なるものに移らんとする懸橋ともいふを得ん。但し此はたゝ後人の眼より見て解釋したるまでにてアウグスチーヌス自身の意もし單に美の感の多き爲小量の醜は壓倒せらるゝが故に醜は美に入るを得へしといふにあらは正當の見にあらざること勿論なり。

色彩を美の要素と見るは固よりアウグスチーヌスに始まりし說にわらねど注意すべき價値は十分にあり以爲へらく物の美は諸部分の調和及び色の佳きことにあり均整統一などいふことゝ共に色素そのものまた美の成分たりと。此の他アウグスチーヌスの美論として傳ふべきものは見當たらず。

第三　スコタス、エリゲナ

スコタス、エリゲナ(Johannes Scotus Erigena)は九世紀頃の人にして早く信仰即哲理といふ中世哲學の骨髓を說けるものスコラ哲學の創始者と見るも可なり。其の美の說におもへらく耳目に上るべき此の世界の事物はすべて耳目に上り難き心靈と等しく神か之れを造りきといふ意味を表して神の光輝を發揮すと見る限り美なり感の欲を充たすは美の事ならず寧ろ理性によりて其の裡に神の作意を認むる所に美ありと。されは此れを解する時はエリゲナの說は一面に於て神の作意を示さしる限りの事物は術品と自然物とに論なく如何なる味あるも美の世界に入るを得ずとせると共に他面に於て美は單に五官に快きものをいふにあらずとせるなり此の說より一歩すれは後のカントが說きし美の要件たる利害を離るるといふことに移るを得べく注意すべき點なるが如し。

第四　聖トーマス

セント、トーマス、アクイナス(St. Thomas Aquinas 1227－1274)またスコラ哲學の中葉を代表するに足る人にして其の美を說くに均整といふことを主とするは從來の學者と異ならず。五官は事物の釣り合ひよき形を喜ぶと說くと共にまた凡て美は神より出でたるものと說き五官中にても視覺最もよく此の均整の美を心に運びて心と合期せしむるの用をなすとせり。されば均整といふ形式はよく幽遠なる理を標現するの故を以て美なりといふ標現主義の面影は此にも認むるを得べし。

カリーヤが美感論は二樣に解せらる彼れは美感によりて人間の欲望は靜めらるると說きたれど此にいはゆる欲望靜めらるゝとは欲望の滿足して靜めらるゝの謂か或は之れを壓抑して靜むるの謂か明ならず。唯吾人は他の點より推考してむしろ欲望は美感の爲に壓抑せらるとの義に解せんと欲す。すはやトーマスの意にては美は視聽の會得感によりて解せらるとせるが如し而して此に視聽の會得

感といへるはあながち會得といふに重きを置きて知解力の事とし美は知解力即ち知識に關するものとせるなりとは見るべからず。此に會得感といへる本意は却りて美感が日常欲望の感以上のものなることをいはんとせるにあるが如し例へば口腹の欲に對して一層高等なる視聽の感を會得感と指せるの類なり。又味覺嗅覺には美なくして視聽の感にのみ之れありとせるには第一此等の高等感覺が能く味嗅覺の如く直に欲望を挑發することなしとの意もあるべきこと勿論なれども之れと共にまた此等視聽の感は事物の全形を會得せしむといふ意籠れりと見るを得べし。されば視聽の感にのみ美ありとせる心にはまた美は全形の上にありとやうの考漠然存せりといふを得べく美の全一個といふことは幾分か美を具象的に見んとする階段とも解せられざるにあらずとす。又視聽覺の中にては視覺の方一層智見に直接にして高等なりとせり此の點より見れば此れに昔プラトーン、アリストテレース等が主唱せし音樂の美は深く解せられざりしに似たり。

第五　結論

要するに以上中世の審美思想には新プラトーン學派の系脈殘りて其の中心とな

(24?)

第三　近世美學ノ組織

近世ノ美學は[illegible]の哲學史の[illegible]に在つてので即ち十六世紀[illegible]後のものである、併し實際は十八世紀バウムガルテン乃至カントに始まる[illegible]

[illegible]アリストートル等の美學[illegible]近世[illegible]

つては其の材料[illegible]文學美術等に[illegible]、其の主なる材料は即ち近世では十六世紀のラファエル、ミケランゼロ、シェークスピア、更に上つては ダンテ、及び古希臘の文藝であるが、[illegible]

[illegible]の期に際して[illegible]

まで[illegible]アリストテレース[illegible]

[illegible]其の[illegible]

もヴヰンケルマン及びレッシング[illegible]

倫とてもまい、即ち友達の手紙の評釈（ガンケンの論三を代表す）及び
哲学思想の論に於ける論を整理して所謂いわゆる
こうらん月カントなるものである、そして後セリングとなり、ヘーゲルとなり
ニコラベルクとなり（ハルトマンとなり）ついに現代
になんぐ

近世哲学の系統は全体からいうと主観的方面と他の哲学部面と同じやうに
一方理論的のものと他方理論的のものとあって、概ねこれらの哲
理的である、英仏のは経験的であって、ドイツは思
弁的である、ドイツは経験的であって、研究的でもあって主観の観察
の分解と道の分析心理的科学的なるものなり哲理的はこれらを
つ感ずるものは論理的に近い上に研究はまるを要せざる直観的のもので
あるからドイツに見なし

考ふるに敬の上ではその條件を見ること

[illegible]

[illegible]

[illegible]

(二) カントに前の哲学者達

中哲学的方面

Leibnitz (1646-1716) の言にDescartesの思に基づく論理

倍ちとは近時 Saccheri 氏の書物で明らかである。

面白みは氏の新論理学帰結と見る点、十七世紀の哲学者達

其他用語、記号の語句を採せばダンテにもシェーラにもあるとか言はれ、

かもしれぬとは言はれぬ、兎も角哲学者として見られるのは

たのみ為るのである

ライプニッツ哲学の家族の中心は夫の父子、

以下略式を極言説ってカントに至るのである。

(27)

宙を Monad と称する所如何なる集散から成ると見る、

ものとは言ふのまさにかは個々生徒の表情の陽陰をうつし出すに
低いか高い所に移つてゆく所と其移る手段は連続的で出来て中
間に断絶はない所と言ふ所から見ると成程面白い立
派なつせんつまり其の表現用の比不比の方で之が表情の
面白味は対比から、下線だけ不比の線で移る間に半比の線から
半比の線に又と思きは新となる（illegible）の形態から
ちりと併し学に断と主観的に決めきるまに線の境は出来ぬ
客観的にも條件を考へてまるはなく式のモナドは客観に
強せられるもので時の強の姿を現す所に真の美は出る
ものが生ずるで、之が半比の線の二、成が新たなものと、言ふ主観
み半比の線の理解とまさに客観には大つ形式美の

個々独の独一なる理が元々下の上に採用せられて居る氏
が氏々の事情の如きを考へ、而もなほ最後の決定で考へられる
力は別として、あくまでも説である、近頃を無視する、又法に注意すべき
は彼が氏理を事実に適用してゐることである。即ち吉野の事
は必ず之の進りを心にそれを知らずして勘定する所に
生ずるのである、即ち此時の事柄の如きは実を生ずるとして
のみ之を有益なる説である。

Shaftesbury (1670-1713) は哲学の部に属する人であるが、彼の美学は倫理的である。即ち形式観、美学根本観の中心観念は固有なる内的調和ということである。彼は美を Characters* (meaning opinions, theory) の中に見ようとした。彼は美づくりを霊ということを思いとどまらず、彼は美を霊の表現であるとなしたのである。

彼の美学はこんにちの美学の基礎となるものである。即ち美は人間の心の表現であるとなしたのである。

霊の表現であるから彼は美の本体は宇宙の霊であるとなす。

而して霊の美の表現は三段であって、第一は物の美、第二は自然から造られた物の美、第三は芸術の美である。

芸術の美は人間の霊が造るものであるから、人間の美学となり、人間の美学は人間の心の進んでゆくに従って美を発揮する。

の事[illegible]で云う最高の[illegible]であるが、[illegible]は同時に真理の形也故に[illegible]の結果は快にして善なりと、[illegible]ベリーは別に新しき要素を加へたりけれど十八世紀の初に於て早くも哲学者の間に[illegible]の説を御一覧あるべしと云へば足る事なれば

David Hume (1711-1776) は英国経験派哲学の中堅でロックにあるはんたい思想を説くまで行かずして極端なる懐疑論を唯我心の習慣に過ぎずと極論すると同一の[illegible]思想まで、[illegible]美学上基礎は根拠のなきものとして[illegible]つよく美感の最要件は快楽にあり美は我心に快なるもの美は唯我心の趣味[illegible]の判断のみなるを指(良味の如し)とされば氏の説の[illegible]は[illegible]の快楽説は他の矛盾せざるべからざるを[illegible]

(32)

平凡化せらるるを免れぬ。其の説は果して快の義には一定の性質あるものと認められた点である。例へば如何なる詩はアテネ人にも羅馬人にも近代の人にも喜ばれるを見てその理由が分かる。素養ある眼識には善く快と感ぜらるるといふ一致点あるべしとして斯く主観に快感の一致あると共に客観に之に應ずる善美の組織なかるべからずとしてヒュームの説は甚の極端な主観説を脱して客観の標準の基礎を求むるに至つたのである。併し此の標準が何であるかは遂に説明せられなかつた寧ろ從つて先づ主観者に一層明瞭な標準を説明し得ることは缺如せられ即ち人心に依て異なる普通の説くあるかといふその主観に歸する。主観主義である。只、之に從ふかぎり満足し得ずして動揺しやすき気の味であるのは明かである。其他論ずれば功利的快と説つて之れも一としてある即ち吾人に快感を與ふるものは最も便利のものなりといふ快なるものは性質に於て絶對なる実用功利の快とも共通なかつ

ヒュームの解の云ふのであるが此は總れぬ又此の快感に二種あるを自設

いづれにせよ直接に事実に関係のある快感と間接に事実の
つゞく二種類を区別する一般の傾向は直接に二を嗜好する快
感と第二に二を偶然と直接に二と三とを或程度まで結合する快
感の区別を認めたものである。而して此の両者は西洋ながらを考へたの
である。さて彼の説は其の弟子の中で
Alexander Gottlieb Baumgarten (一七一四―一七六二) は
一科学たらしめんとする彼の美学の系統は S[illegible] 和
を通じて一種の思想を知識を吸収の二つに別ちて見ることを他面で
あるこの一部は情を思考上の階級の混合したものとする点に又
彼は知識を吸収する側と不明瞭な側とに区別して其の明瞭な側
Vernunft Verstellungen) とに区別して
平[illegible]
見なしたのを初めて哲学と呼ばれたのである

パラダイムとしては美学まで完結した知識 "die Valle=
kommenheit einmlicher Erkenntnis" である。
まず美学は概念と結合して最大個性的認識の
ものである。故に哲学と美学とは共通の性質を
はらんでいる。利の地位を研究できとして其の
Aesthetica を成立したのである。而すに美学は哲学と
此はは文学と結合した状態としてある
の方式をとる。ーガのれく
定義のみを成すべーとーた即ち
ゆんなるものやなるものや形式
ムガルテンの見地は代の心理学的
と学的なる地位を彼は見つ主観的
傾向のもの形式の美あるとし法いで

形式論理に

主観的形式論すなはち我々自身の一種特殊の[illegible]式に過ぎざるものにすぎざるものなりとなすべきなり、けんども彼は[illegible]に[illegible]

[illegible]観論の一つ[illegible]なる[illegible]定[illegible]れ相は者に主観のみなすべき[illegible]

全宇宙の上にもあまねく一つ一層上なる[illegible]相を見出しつゝあるとし

好み新の最高なるものは却つて自然界にあるとし[illegible]

[illegible]

(乙) 科論的の美論

Edmund Burke (1730-1797) で

"Sublime and Beautiful" の著者である 其前では佛の Batteux (1736

—1797) 等の美的科論が盛んであつたが其の学説はとるべき方

面は無きにあらずとは云へども真正の美とは見なされなかつたの

[illegible]

さて八つの性質は美の五要素を挙げて(一)容積の小なること smallness
(二)表面の滑らかなること smoothness (三)輝度の変化
多きこと variety of outline and curves (四)華車なること delicacy
(五)色の光彩あること brightness and softness
of colour ということがそれである中にも滑かなる曲線などは形
に重きを置くらしい(なぜかそれでは)
なることを要すとし容積大なることは特に緊張感を
weighty とし(無記)まく曲直長しく strong derivative 時潔なること
and gloomy となすべし三小形最なりと雖ども特に奇の及
ぶべきから自然美術に考併し同時に美人は元来快感を得
「美」とは新と同じと云ふ説は平凡にして秘隠の説でもあるが
「美」は美術の中から性質が生ずると云ふ説に至っても名な説
つなるも彼の意の既定陰は美術のものも之を単に情緒

みまもれば快ともあり苦しともあり
情緒全体としては Beauty なるべしかあつてもかが
情緒全体としては [illegible] なるものなるべしかあつてもかが其の
[illegible] 中に [illegible] 美の性質の説明は有
益の思想である

Lord Kaimes (1696-1782) は Elements of Criticism の著者
であつて彼は美学上の問題に対する解釈に
なほ [illegible] とを対照して美の二転とし又一時
期の美学を新一期の美学を表しいはるべ
き [illegible] 説を論駁した意味である

Hogarth (1697-1764) は Analytic of Beauty の表わ
す美の要件六つを挙げて曰はく [illegible] 即ち [illegible] 其の目的に
合致する [illegible] 即ち形式可変化性 [illegible]

(38)

Variety 即ち変化を統一することなり 四は Simplicity 即ち
單一なることなり 五は Complexity なること 即ち複雑錯綜してあること 六は（但し其中に全く雑然なるは不可）
Clearness 即ち見る人の認識に適する大さあることを言ふと称
~~又此等の六は同時に応用することもあれども必ずしも~~ 而して此の六理
を最も明瞭に表し得るものは 曲線で 即ち曲中に直ある形に存
在することを言ふ 所謂 Line of Beauty と称してゐるもの
要するに右の六則は 最も明瞭に之を表はせる形式美の原理を表したもの
といふのである

以前のレッシング論争の三大評論の著作を著わしたのが Winckelmann (1717–1768) の "Geschichte der Kunst des Alterthums" である。彼は美術史の祖といはれ、古代美術を研究し、ヴィンケルマンの考察の結果、それを断定した。彼の説は古代美術を研究するに併しまた同時に古代の形式観にも拘束せず、抽象理論の新説にもとらわれず、形式観を代表せるものである。

なお詳しくは Die Kunst bei Schönheit ist in Gott で Ideen der Unsinge の著書 Wien der Schönheit である。

Vollkommenste Wasser, aus dem Schooße der Quelle geschöpfet, welche je menschen Geist

macht so tief durch jeden Zweifler erschüttert werden, wie es von allen freien Theilen geschieht.

Einheit und Reinheit

Einheit とは或種の性質を指して言ふ但し個性とは個性の物をも其中に含む純粋性にあらずして

Reinheit とは個性の物をも其中に含む純粋性にあらずして

Lessing (1729-1781) は Laokoon と Dramaturgie とを

二者に区別せるものなれども後者は前者の補足にして畢竟同一なるものなり

Laokoon

偶像について論ずるに彫刻の美は美の表現にあらずして美の表現なり

偶像中のみミノルバ神の表現は美の表現にあらずして美の表現なり

Plastic art の特色

Mendelssohn (1739-1809) は "Morgen Stunden" の著者として知られる哲学者

で決して帝国臣民の権を侵害しようと欲する訳ではない。

と述べ伸ばされた訴訟 [illegible] 然るに

訴訟を提起し [illegible] 法を犯した [illegible] 国家に陥るべきのまを表し [illegible]

は [illegible] 国家のまを考察するを要するとするのである。[illegible] 又 [illegible] は

其の新奇の点地を慶同して訴訟を [illegible] 国家の [illegible]

[illegible] 訴の表示する情なり [illegible] と言う [illegible]

[illegible] 心と同じく帝国臣民を所有し、同時に [illegible]

[illegible] 仕事しうるしかと、つまり [illegible]

[illegible] 性質を [illegible] 仕事しうるしかと、つまり [illegible]

[illegible] 性質と [illegible] 別けて [illegible] 考えるべきと [illegible] 同時に [illegible]

[illegible] 個性 [illegible] 設 [illegible] 移り [illegible] 思考 [illegible]

[illegible]との中間に一の別なる四段をなす事すなはち[illegible]は純粋で決して功利の為に開発[illegible]と見る[illegible]カントのかなりもの[illegible]の説の別段をなすものである。

(三) カント美学、

(一) 其の[illegible]の[illegible]と同じく

[illegible]千七百八十七(一七八七年)美学[illegible]在来の場合の思想を[illegible]

[illegible]して其の新しい点を其の上に加へた[illegible]

[illegible]は[illegible]以来の論理の説はあまりに複雑、又明[illegible]

[illegible]ばかりの説はあまりに[illegible]

[illegible]あるが、[illegible]未だ[illegible]

[illegible]る(カントの美説は立派な[illegible]

[illegible]の[illegible]は其の説[illegible]

Practischen Vernunft の中[illegible]

der Urteilskraft と共通の手段は極めて心理的なものである。それは
従って知の上から見て客観的に知られ得るよりは性格的の特徴を
(understanding is) 「斯しあるべし」とする止まる。Dass es so sein
みは偏れたるの故に理性の要求の命令的な形式出てきたらず、実
際的の方面では我等は内に理性の権威命令を最後の判断を我
等に与えるを感ずる即ち不動に対して最後の判断を下してゐる
理性の最高審理を第一とする、既存高尚なる理性
氏の理の最高審理の流れを汲む思想の根拠である。と
言葉氏の如きは、最高の客観に主観的である。峨程実際はるかに
そうついて理性の判断を下して知れるが人の力を使用
して見ることなれば「斯しあるべし」とて其の「あるべし」いけどあ
る客観の必然を偏れる点に於て主観の見天
的の理性はまた主観の意志の力に基礎する併しながら氏主観と

カントが許した唯一の変化の実時の変化の法則は純粋に理性のみ
中にあるものとしてのみ判断力批判で、カントは云ふ場
の方面の和らげた言ひかたにすぎない快苦の感情が含んでゐる、すべて平均な言
葉でいへばカントは各人の[illegible]根本は要するに[illegible]
に快苦を感ずる是れ理性の直接の表現なり快苦は[illegible]
しかる是れ軍理の表現なり、理性を生み
就中お祝に於ては快苦の[illegible]感ずる、之れを絶対の
(一) 善なるもの
(二) [illegible]の[illegible]を判断した
時に快であるか、はたまつらく是れ元地の[illegible]近 Quiekmässigkeit
あるものと云ひ[illegible]と云ふは[illegible]宇宙の目的を有して之
れを目的論する時に安である、之れを観照する時に快感を生ずる之れ

こゝして縁近接一と口に言ふ時は地位を感ず、こゝに縁近接二種あり、其の主観的形式的要素のみ唯見的あるとのみは感ずれども此の二心を兼ぬる感じ上さいふ形式の判断は

Qualitativ Relativ

で有る又直接的感覚的直在的に於ける其の対象たる方向に縁近接せりとの意を含む判断は

Modalität

地利は二種大部分から成ると思ふ、判断力等級の根据で考へるこゝし縁近接は在来の色彩の孔もせむとさせる

(三)さて線此の純粋の義の説について義を定めて

Quantität

零は四点を結ぶ線、

四 距離からえて

つ内容、現実線、此作、状態みよって知りやすきは独立の形式の

定めてから

方式を以て

の物を対象とする時、

の方式を以て

さて其の性質上[illegible]は Gerechtigkeit である。

和保利害ひろく[illegible]其の形式から想定的に判断して

[illegible]快感であるから也に何の[illegible]加らず性質利害の定

有[illegible]さて此の点で美は Angenehm なる Gut 異なり快

や感性美は生物の上の[illegible]利害[illegible]の[illegible]から生ずる

ものであるから客観的[illegible]と[illegible]つて[illegible]快感[illegible]

見るの事物を[illegible]美は理性[illegible]見るのみに干し美は Technisch

[illegible]にのみ干すべき小三快感の[illegible]れてゐると、[illegible]

[illegible]の家で[illegible]希臘[illegible]未開に[illegible]利巧

利益と[illegible]見[illegible]と[illegible]快に[illegible]から除いてゐる[illegible]

以利害[illegible]ゐるのである。

次にカントの善の見方の第一は Quantität である。之を見るときは美は
概念 Begriff から離れて普遍 Allgemein 的の快感 Wohlgefallen
をあたへるものである。普遍とは我他の差別なく何人にも同様に感
ずるものとすることである。即ち其の根拠は我々が利害
の観念に基かずして主観的である。即ち主観的な快感情の判断を
我々は求めるので普遍と云ふ[illegible]好ましいものは之を客観の真理なるが
如く思ひなして之を Begriff の中判断の中に取り入れるが主観的
云ふ所は主観に普遍性が有るからである。と、
Zweck なり。茲に関係しては美の(時の強さ及び即ち長さと多に同じ)
而して目的より見るときは美は Zweckmässigkeit ohne Zwecke
[illegible]の目的に対する地位で關係に対する干係である
即ち之には善外的と内的の目的がある。外的の目的
とは人間の利用の目的を知へることで即ち利用[illegible]

（恰度 我の我に対する様なもの）

自己である又内的に自己の為すべきものの目的である Vollkommenheit である所の神と共に神の命令はみな
自己の判断の基礎となる神は自己の為めに概念的に作られたものである、即ち理想的カント、オーガスチン、ウルフ、ヴォルフ
は一般的に言ひ得る事実である、神の命令は人間の為めに作られたものである、神の命令は人間の為めに作られたものである、
又神の命令は人間の為めに作られたものである、

（人間の為めに作られたものである）

と云ふのである、其の他セントに於ては恰度我等の心の形を
よって了解すると云ふ事は理解すると云ふ事である
の通知 ～～～～～ 此の了解は直接に了解すること
形をば為さんとする又理解もまた理解せんとする時
要求は通知 創成的な理解でもなければ
既に神の命令は人間の為めに作られたものである
とこゝにまでゆかねばならぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

この関係はかなり二箇の矛盾せる思想から不調和に作って一系の
哲学を個性を捨てしむる結果を生ず、第三、
[illegible]花園つ続はれしかども理解統一の[illegible]例せられるによって
直接に国家の理性から活動し始めしめつとしられたは科学的記録分析
多くの科学あり、[illegible]

カントに後の美学は彼れの見えた[illegible]主観思想と客
観思想との両面が分れて進んで美味で前者は心理的美学となり
後者は[illegible]理論的美学となって、後者は独立を中心とした
カントに於ける引つづいて[illegible]美を[illegible]中心として
近世は発展してきた。Schiller は Letter on
the aesthetical Education of man で遊戯
衝動 (Spiel-trieb) の説
を中心とする Schelling は其日全集(前出)中

Spitzer des Transcendentalen Idealismus"
なるものを中心とする方面の方をはじめとする人
の一人でむかしからき一人で自由と必然、理想と現実、
とを或の調和を考えている思想である Herbart のはじめて当
時の学者中異色な独創的な経験説の立場を採る形式的のように
なっている人間の陶冶されも色々な方法をもって
Hegel の哲理的思想を基礎とする理論の実現をもとめ
ることを其の学術方法とする Zimmermann, Lotze, Hartmann, Fischer
大多数の人は Velor Zeiderst 及び Jugbart を中心とし
其他は Ulrici の思想説の Grant Allen 等の Spencer, Bain,